

207-30

俳諧資料カード

年代	天保4
編者 (筆者)	柳亭雪村
書名	柳亭雪村
備考	三十七

(下垣内蔵)

柳亭

奔主人

下垣内和入



今や名もなき川乃  
文日と名をいふ川屋おれの  
西流よ〜〜今此柳と梅川を  
す〜是もも川原〜その縁の  
三つ巻糸と被すを形する柳乃  
西風にりとはな〜い屋を凡そ  
あそび〜ともをさ風十面に



け道のみの事を歌いしものあり  
三千七ツ流編み柳の結末しり  
若くしとてしりしとて急勝を  
かえりしをちの暮り序は

文化四所の終



川柳風句合吉例角力會

文日堂評

上ノ部

一眼ぐり中家の曲り多き

極胃の名取くし式部を

富士の裾川張るわさ之ヶ玉

大きか内と建こからせぬい

化玉へと扇ぐりくきの後

勇しん車力無甲の中場へ来り

英徳

賤丸

扇橋

英徳

九砂

波静

上ノ部

土分伝もつ川を流るる水

和里

目茶のゆきを搦山の楢

花夕

横らるる水に葉をしの火が熱く

一番

日本のはらと一板に流して物

谷水

ましおりの水 凡を少く立す

木賀

日本から流るる水は日紅

青柳

不二山とておろくちいさく女

松柳

流るる水は牡丹の葉とあけし納り

本賀

中ノ部

冠とて流るる水は一葉はら

義徳

中々ちちく小ぬりてあぢる所を

九沙

おろくく社とてあぢる水千燈

全

日本中を流るる水は一葉はら

和里

奥の山の水を流るる水は

花夕

を流るる水は

一番

杜若の木の根を牡丹とて

本賀

流るる水は

集馬

中ノ部

少歌の休路イ物とのう経一  
葉好がいろんにはりて夜とけれ  
吟<sup>ニ</sup>えよ是のこゝろる<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>さ  
又七文のよふ<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>び<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>な<sup>ニ</sup>す<sup>ニ</sup>あ  
お門とよこ目であふむさう<sup>ニ</sup>え  
白むしと黒むしある<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>れ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>て  
ど川ちとの<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>も<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>金<sup>ニ</sup>氏  
十さび目の<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>よ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>ふ<sup>ニ</sup>れ

一考  
谷水  
森鳥  
花夕  
柳子  
雀馬  
丸抄  
本賀

同

花をのそ世<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>柿<sup>ニ</sup>栞  
物角力衣敷い<sup>ニ</sup>ぎ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>む<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り  
あ<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>り  
関はら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>席<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>種<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り  
舞のあ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>楊<sup>ニ</sup>志<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>り  
多<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>津<sup>ニ</sup>志<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>む<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>村<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>き  
業<sup>ニ</sup>種<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>場<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り  
え<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>角<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>り

干之  
喪鳥  
眉長  
馬地  
柳雨  
水吉  
本賀  
一考

前ノ部

何んぞんの掃除をえらとふ佐近

紀末

姉さんとまひをて落参子つめり上

賤丸

急がし一象さんじん柑をち力のま

眉長

肩すかゝ志を投てまろ膝口

燕子

似せとちく子をかんがつる二金自

千之

芋賣の女産力年子を志まか

豆人

くねをたして紅いのを舌をあ

扇襦

大尾かゝるまきひり 天守

天作

同

菊をむがまき孝子二味酒くらう

谷水

お菊さんお富さん一ツヤんち

壺鳥

念仏ぶりりく吊ぶ山を徒

吹唐

ざらに人と吾んぶらう所り

豆人

鬼の子のぬんぞう猫の草でも

吹唐

雷の子をまばらつるの脈で何い

露考

空をながし麻はむらう月と悪塚

林文

まねでま名の御を幸改ら

谷水

さて昔号ぬきと芋とある

保良

船アがそまのしとらにを撰く

一考

兵うふらつひびを徳和の布袋

義徳

すがきとそと深なるち物連

教売

あなが麻ごとしけ猿あ

一秀

鹿豆のかまろ徳園あう

谷水

ぶろとすろしがねをがから

木賀

あむぐと女まろり上

柳雨

左渡か母馬の着又て乃

賤丸

夫多の引法さゆまんとけ

於柳

すまもちからせん後にから

豆之

小俣と流しをんぶろり

豆徳

指をくまあゆとぬら

丸沙

十目りのふらそを

丸丸

月平を能い八赤貝と

谷水

房州七やそくおゆ

燕子

以上

二會目

文日堂評

光陰の幕以て花をよみ川霞

琴我

徳着れまゝと彌もさうらぶて

森鳥

九手に海へで名をいひなきく

花夕

○ 初知の日まで眠るを外新柳

二蝶

糸本にまぢれ茶里の門まき

森鳥

遠草の中へ動く忽大武禮

二蝶

物つても柳物に縁があり

琴我

やさしきハ兼ありむ若くは

花夕

市席り糸の社を坊まきとら

賤魚

徳本とたのし甲斐ある名匠之

琴我

肩ぎぬとかいづりまきりく日和

保良

うきあつと狸つとくさうさう

賤丸

つるまはて三味せん坊の小籠つら

二蝶

替えらば父の志白くまぬ名

花夕

松の志のぐや山吹らめくさく

全

あつたの影遠麻と旭のさく

都柳

養子の若きそとてか、息子氣をなほ  
 登んがんとと慕のふがらむるが  
 鞘の毛を静らむるをなほ  
 をぞむ文小を快の之音と  
 松の内附木の急胸で於山旅  
 ○あつとる痛がり四輪車をなほ  
 季礼の串さし草でちりとも  
 子がかけては内仕は除飲の獅子  
 午房一七袴をなほをなほ

賦丸 亦樂 琴糸 森鳥 和里 吹唐 和里 丸龍 金獅

○今の如きんそがごとおまねと子  
 二日の夜模新まの若とと  
 お富とふぬいら月十三七と  
 碓雨でもいふがのある次方の浦  
 をなほとよとよ引をてや入き  
 の所ありと海ととも百の内いれ  
 仙洞殿と湯好まごとと女思ひ  
 くらきくとと智恵のねをなほ人  
 ○素毛が苗字のとおまねとをなほ

若蝶 琴糸 雨江 吹唐 自主 花夕 和里 吹唐 全

梅も好根を伐落に引さられ  
 玉丸物をおきまゝ娘まうとるき  
 おちよとらねんぢぢに禁白之  
 及後んが切き名白くくそそ林  
 よう一の空のつゆハ云々  
 こいどうそそ大根があや中  
 後地の祇もを捨て鼻のぬけ  
 ちんちんと鯉のぶい今とぬて樹  
 沖まにのるえぐまやふふ女つ又

梅里  
 吹唐  
 赤楽  
 葵糸  
 都柵  
 喜丈  
 敷壳  
 吹唐  
 花夕

小石川澤藏司稻荷額奉納句 三會目  
 文日堂評

初年の日か子れ目がセウ以兒  
 二月の光り照さく沖神徳  
 三界を守護一海交の沖勢  
 武の玉くまねかまひ一沖神号  
 残の男れ業とそその候沖神号  
 一の字と表表うた沖神号  
 三月の光りそら山なり

香真  
 玉章  
 牛賀  
 箕山  
 丸龍  
 春駒  
 似佛

十言又の内ても常む所縁日  
 羨徳 全 春駒 九龍 志丸 義徳 九龍  
 〇 咄ひよもし百詠かゝる富士の羨  
 豊年のおきくし 志丸も、孫の向い 木賀

山の名も常を奉り世とちる津  
 津カれ恵も海を小石川  
 物をもし極意を三人考へ入  
 賽後とそ責を路おしく物  
 みのつとて稲穂の波もたぐさき  
 山内へ隊の移る日れ縁くさ  
 十七檀林と聲の声とゆめキ  
 三王に一五たぬ山門番  
 一ツかかふ千里へ後る日本橋  
 天作 都柳 柳雨 志丸 轉寢 梅里 門柳 花夕 轉寢

也と年のを解りくはのちらほ

ニシヨウ年のの部ゆいし録自

とてとてててどゆく事解解

おしどろ下葉神農も歯がま

神農の言をてんて年節とな

あちをくあちをくあちをく

屋徳どそそおその徳ゆま

あのとゆも下位りく初め年

まふ口のまかふるのゆる名句

二蝶

雨江

谷水

魚川

琴我

木賀

眉長

吹唐

丸龍

妻か足知章年々くは馬くのり

伊能自安初ねだたかりごと

おそむハ二八お初ねすは二ちあり

五揚もるらも暮目七武の内

美よりと成るそてはは玉のこう

神化の名述より一泉のまをさ

大石のちをて物まのうのの

余の神化をさくおりしりき

のとゆきおまをたけて嫁の礼

琴我

青露

森鳥

若蝶

丸龍

吹唐

香貞

一秀

柀雨

○浦清とそらきとかんで争がり  
 息子づれ九節脚一社あり之  
 すがうに首座の松風をあらう  
 ぬせがのこを勝つてきり振うさ  
 宗道と仲するの急なぬをよこ  
 てるかきぬぬつうまきのさや  
 けき降をあげと屋敷の松上げ  
 出陽をらつ川崎人よと虎おひキ  
 かんえんの空をさと空を知らる

和里  
 横好  
 琴が  
 春助  
 有幸  
 方旭  
 柳雨  
 有幸  
 保良

新やどにあくぬれ苦多まわいと  
 祇手堂二八のりいさ川し  
 初午のあぬぬおふもたがつま  
 ぬよの川ぶとと左根ハ敵を逃ひ  
 高と又逃にかろいぢ  
 中卒をとおかき喰く名画之  
 おひ屋を海自のあづきと  
 韓信といふあでんさるさるは  
 大根とすまれのあまをきひ

羊洗  
 柳雨  
 梅里  
 賤丸  
 喜太  
 未楽  
 燕志  
 林鳥  
 和里

右國へ沙都でそが人狼り火  
 稀妻のれしと女狼りて  
 猫と強きとを扱て狼り  
 卒新占六の字のよみ  
 けらち中川世と云角に  
 家母が若人とのゆき世終村  
 ちをたふれ惚とてハちて  
 ちをたふれ惚とてハちて  
 ちをたふれ惚とてハちて  
 ちをたふれ惚とてハちて

○ あまのついでに陰の欠き之陽を臣  
 紀梁 森為 賤丸 木賀 志夕

神凡さくらまをる柳哉  
 文音堂  
 砾川

文化四丁卯年二月初午 願主 木森為

右額面摸寫 補助

牛賀 琴我 賤丸 千之 豆人

西野播荷杜額奉納句 四會目

文日堂評

○ 石拍もも龍も忍びくろくふ年をう  
 坂を押し車力の物なる初之年  
 弓彦をもとと秘づもの丸本橋  
 枿わうとつ川さすのまをわうと  
 ○ つういのもむ心嬌のふじや物を  
 暖屋飛かつて男とおまふじ  
 け世がく羊穂くままでこのしん

九龍  
一文  
里松  
琴家  
森鳥  
枿里

○ 口くさうと橋のおぐり  
 ○ 琴魚ふ孔明あごと捨てあ  
 唐人とまをう作てしはりあ  
 矢のおくくする上ぐちのつが星  
 ○ 三葉の節ニそまに思ふ飛りま  
 是とそやややうがさく去り山  
 ぶを捨てた教とハアくぬあ丁所  
 玉子の扇の卒庵おもさる玉  
 ○ 首陽山あその分をもつしある

柳雨  
木賀  
柳雨  
琴家  
様松  
里松  
若蝶  
九折  
魚踊

正さうなや川に葉くふゆきく  
 実成子々たぎい秘屋とらう  
 めづしい声啼てけきひんでけき  
 冬能くも西風にくるる柳ーさ  
 むかひの志うあまんまふの面白さ  
 りだごうくくいのちやまきうひたう老  
 切岸 固平舟が川き出され  
 妙心の後撰とらう粉と喰ふを  
 それを秘命と屍とゆひ初らうと

琴家  
 菊旭  
 花夕  
 白主  
 巨人  
 花夕  
 弓成  
 露秀  
 賤丸

男の只んまきさぐらに角がそく  
 吹んぐくふにがたうけて鬼をぬり  
 相の若くは松年を局あり  
 二の年々娘翁をとりよあやく  
 川ごとの肩ですうーて吹かぬ  
 妙方と面をいとう中とそくはだ  
 みるには青をうてある玉ニツ

白浪  
 山寺  
 柳雨  
 二蝶  
 都柳  
 全  
 谷水

文化四丁卯年二月廿二日

願主

琴我  
 賤丸  
 柳下

下谷稻荷額奉納句

五會目

文日堂評

雨三交風と六ふと沖鏡宣  
千之

非の田の荊穂の箱を沖鏡の  
都柵

春の夜の六千あををるる  
千之

心重のかくぞとすぐま正一佐  
扇柵

を白うとまろんがそ流うつら  
青柳

わさの浦さのうらと浪が  
扇柵

をあを流をさのの流と  
千之

二の年とらりあつるがぬぬ  
全

言貝とのうすしてうら  
全

八を何とみる神に極る小柳を  
全

あて女の玉苗をみる田極を  
扇柵

○小柳のよもあもわづい  
都柵

非かに神年をみる柳  
扇柵

○不男も極むつと流ふぬき  
青柳

玉と建屋と口とをみる  
扇柵

流うをみるさのの柳は  
都柵

あいくせに身書とと奉れ之  
虎の威しかりげ候く一年まかり  
○紫葳の多かりて大根も木の心  
神しく神指をそのまゝ口日布  
申うまゝ味候とどの執りごの  
堅可んで雪とアそ取るまゝけ者  
一年せまのまゝでいせ屋敷の  
小便が神を常と化る紫の所  
衆と申す月で赤くんでるまゝいす

於柳  
三心指

全

散売

青柳

於柳

干之

府指

青柳

○松茸と吟々々赤貝をどと吐き  
まん玉が上之ぬくまると角を赤獅子  
湯でゆつと尻の玉あごのつら  
○昔の湯番のちまもと小あつら  
大あつら獲獲くつかつと  
おつらつら化カと福れと赤紫

於柳

全

全

散売

全

麻指

青柳

文化四年卯年二月廿七日

願主

青柳

下女一題

文日堂評

六會目

下女が百人の首三つとく

九龍

板が笥ひやとこし下女をさるひ

全

○ 雷学でなれば後ぬ下女が毎

散売

内首尾よく下女六目のはしを竹

喜文

うごんげを小麦の心と下女がひ

散売

○ 下女が髪みぢられて今朝ハ首尾く

魚旭

下流くやひえ袋く下女さひり

魚踊

下女が親あのをとて氣で中人様お

牛賀

柳橋 下女流んで刃て後とまチ

志丸

ゆらの戸をまけけ下女があぐり

散売

○ かつぐれと下女たませもが露とけ

本賀

たまの下女併題目と師一お

扇橋

若菜年の鼻はくぐと下女がら

谷水

よくを威下女がそきまにうてけ

保良

在局そ奉下女さつてつるま

恋鳥

番のそとをとりて下女ハ炎

柳面

後海へあつんとてててててて  
 下女  
 下階でそのりぐー下女の影下り  
 花屋とまごつく下女と花が来る  
 ぶぶぶと下女とお後をよくとく  
 おけいそくくお子と下女目見へ  
 ○あつと下女吐れバ登流う舌と世  
 のせとがろえぐ下女大の根ちり  
 田舎下女草にそけにそろうと  
 あどと下女かの子まごにりり

琴家  
 森鳥  
 山鳥  
 谷水  
 花蝶  
 森鳥  
 谷水  
 茅洗  
 森鳥

ちとりの子う屋あ子下女に子  
 ねろい下女新巾もたつとび  
 供の下女はもををんむけらう  
 だまり印おぬが下女とさうい  
 かつと傘何とてあさう下女知  
 まご下女 equal 下女のまご  
 悪鴨のまごとあつとのおと下女  
 運つとお首下女めつとく  
 新言の下女較もあつとつとわう

木賀  
 眉長  
 丸流  
 森鳥  
 志丸  
 眉長  
 谷水  
 丸流  
 森鳥

○ 身と鹿があいで下女と字途之

魚踊

ふどうれそ下女とせしうまやゆち

一交

つらまぐいし川う目のまッ下女の後

豆人

おきやぐれや女と川ちりし何登に

丸珍

○ 機と織る下女をあらわし

燕子

まごぐらとあいが鹿はあひし下女

琴か

ぢり兒の下女とあうで茶をくれ

豆人

三脚が悴と下女と柱ク人志

柳雨

○ 内陳と下女は織りておがまぬる

山鳥

花らんのもふ系するある花

茶旭

秋まどかまふ糸粉の中に花

眉長

二儀 春もあぶくをさる花

丸籠

花は砂のこえちやとあひ喰ひ

未賀

あてのないうを藤してある花

森鳥

ち志やの舞をしかりし斗か喰ふ花

丸籠

花はまはともくあややをう

金獅

花は夏初つこのをたわくぬく

二蝶

子の初い百七キ入しの花

扇栞

花の為さ太の字さめて我々  
我々むしーの我々のい男  
わんじきにたまひかどさ我々  
まさこくしーキとまこさる我々  
我々一十波うらぐ我々  
吾等よく歯をこがいてる我々  
甲斐の目をあつり又我々我々  
我々吸ぐぐの火で咽をせき  
あぐぐやるとは質の利我々

豆人  
志人  
志鳥  
琴家  
芋洗  
麻栲  
里北  
酒中

我々一ツどりあつり我々  
我々百万金んぶをらなう  
我々い川もせん金んかー我々  
我々あごさの傍をかくかく  
吾等あつりさるに答る我々  
とれさたままよあつり我々  
猫ハあつり我々あつり  
中あつり我々あつり  
我々せんしーとあつり

志丸  
豆人  
酒中  
志鳥  
志丸  
志丸

花のゆんづん 花の後の後り花

茶旭

○

花のまゝ系粉のうきと三三三三

酒中

吊いにもいひ 小桶ハ花ハ

漆栴

小山田の散葉を善い 花ハ

系洗

九ツ志んが志ん 志んハ花ハ

二蝶

花ハまゝ花ハこハ花ハ斗カ

壽雨

花ハ押を吐ら 福らら花ハ

琴我

花ハの火中 花ハつら花ハ

木賀

花ハ内花のハ花ハ坊ハ花ハ

着蝶

○

花ハ将もそりに花ハ花ハ

都柵

○

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

馬柵

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

花ハ花ハ花ハ花ハ花ハ

花ハ

半田稻荷社額奉納句

八會目

文日堂評

其半田をとり米の中を乳  
秋くれは米の為とある程あり  
農氏の糞と抄出の小づら  
田代のしも時をせいのも米の及  
米凡小の之那久稲のみのも  
秘書のあともさき一回の定り  
正屯と高屯にゆくまがりが

糞鳥

仁成

千之

平賀

漆壳

本賀

豆人

室井の名句を箒や筆か  
半田ありと川 船の一  
もしやと名もか  
乳の満の板につら者の差と  
めがらあさ名不と抄上  
日本の乳を標小名と  
大川一室井と終る  
舟出の標と今よの  
神をでる屋の

丸新

吹唐

柳

賤丸

里花

名花

名花

名花

谷水



男の足えをけしむ坂をん坂  
 あり夢を多し疾く不害候をな  
 股引と御織ぶま田代の新  
 自梳と地臥事係れぬと智牙  
 麻カ止のきんをうける胎をを  
 何と種とて意ををば誦ぶや  
 大島以狸の穴へをを合  
 ぶらぶらしてアは月影白く  
 大勢屋のたび竹箒とあり  
 花夕  
 成丸  
 徳唐  
 一三人  
 秀  
 謙  
 表徳  
 木賀

どのく修む魅とそそく方とそ  
 寄つげ下女竹言にそめり  
 楊枝又世けとそそをを  
 素人芝新かなむいびやま  
 小便を二階くまらあり  
 ぬきまねと江のなぬいま  
 陰陽のあをを種め穂と  
 丸丸  
 花丸  
 琴花  
 花丸  
 花丸

文化四丁外年三月晦日  
 願主  
 里彦



本の下やの松屋上より急がき  
月中をらなあり然るは月かりり  
茂雲が描く氣とそらぬあり  
けりともよりみりな文字ハ糖  
豆のあさりけニ夕月より  
お川うらん又物ハのそと子なき  
夜くの考であつしと病つて  
おろいそ書秘はぬふ不二の  
谷のきひのを新西郷理を糸

散売

良徳

龍眼

心糸

和里

比来

禁裏

谷水

琴糸

運のり柳を令に根が砂り  
おまのて百方なをぬらう  
登るはちうさうふして歯がさ  
山ハハ然して南へ買ひより  
何れをぬるを雷にけりまぼを  
控利を流しぬるはぬの雙  
自のそゆびくぬる田中橋  
たをを来らるを二階であつた  
交をさるあよはハ何れをハ

吞絲

妙丸

雲糸

山聖化

徳糸

良家

谷文

徳成

柳而

浪の粟もも守を仰むる念仏

二蝶

女房の仇がまきしそいく田流

二蝶

瓶もがく後植でらぬの角が割

二蝶

お前もよのあきにくまきし隣の子

二蝶

そつ勢に出るさるまきをたててあし

二蝶

そあつのもぬき高を引てする口車

二蝶

入柄とぞ遠ひまんと下女おま

二蝶

おまごの里と能くまごと下女おの

二蝶

まきそそまき森に宮生のはがけ

二蝶

さん儀が川又流る中めり

五入

暮物く十八りむ夜ふちり

暮系

あつまをさりまがりそく

五入

まきまの秋かよとそに誅まれ

五入

まきそそまきをまきまを

吹塵

うごんげの空を似ゆのふ洞屋

五入

女房のまきとまきし車る

五入

おまが久とまきと三浦のまき

五入

雷りが鳴るまきとまきを

五入

三皇  
 けらな意路もくやしを遠行  
 花又  
 玉のまよりけ 柳かがある  
 沙羅柳  
 手面うでかじをかけと乾ぐり  
 一考  
 三考  
 中の足中をさうぬ腹り  
 吹磨  
 とうとうとうで板中にぬるり  
 二蝶  
 物ゆとぬがぬられてぬるり  
 一考  
 足どゆるとと地を洗つて

十會目

文日堂評

おけしのいこれと癒了厨と味  
 切し味しを筆しいぬ中執と  
 一考  
 ○すのまゝ天まごもり孝の足  
 筆と筆と去乃座近意が出来  
 豆人  
 ねゆり意と禮とゆるが平き  
 谷入  
 ○乾が物ととむら麻がとられて述  
 都柳  
 一考

お日目のたまふが十日目をえり  
花夕

極月のすむりく今こむ先  
為人

をひく一板こびひて葉落葉  
葉落

肩をさくぬる地もささや  
北

一十油のまてテしゆりの源を引キ  
ある

田のちが次まをさそそ  
葉旭

○安永の種と荷くも秋づら  
葉落

一戸と月ま熟さひほくが守  
水さ

と一切を離波も修路も日ど  
為人

越る今よお事あめあど  
花夕

出ぬ人く括さねの物る  
里松

蜀王も名くあひ下を念が  
谷水

ゆやゆく軒を淨植の種で  
半賀

沖津糸の初ちやさく川ちや  
斗丸

やくぬしひ母房を去って初  
本堂

たろ常と疑垣根のち鏝  
谷水

ゆり母とといれどは袋を  
琴糸

今産んで子れちとつ  
谷水

何すこの夜人よとてまねと泣き  
あはれなりしを是く嫁こめると  
父母を身代とて百くむるも  
ちうめくを遊ぶなりとめさ下知  
よあのあひ顔が嘘言一ウ上戸喰ひ  
柳やうきとてまねとて遠が由朱  
業平とて考られを探は雲下らぬ  
氣の川解への川てる久土は  
源流の奥仏の故も折らぬ

二蝶

牛乳

花又

貴鳥

柳里

吹唐

柳京

柳雨

虎入

二ねちくとまうりぢのむす所  
竹の子の若人足さば教ふら  
ニテ平々迹々 折玉が空をうり  
庭涼嵐が嫁を遊らうとる  
かけむくの虫を袖くをれありんき  
今とてぬるまぎとを教へて夜をうけ  
折玉をうりてすけいふらなる不  
白肌が物とて本肌らふあふ  
西千折えらぬうららるる原もあり

里地

牛乳

柳里

本堂

吾能

彼聲

花又

貞徳

燕子

かやあきんごうとあぶらとあせりあき  
あつ同とあつ小玄の二書あき  
うらものあきあきのあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき

志丸  
扇橋  
琴糸  
あ蝶  
森鳥  
一考  
あ徳  
斗丸  
全

あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあきあきあき

志丸  
扇橋  
琴糸  
あ蝶  
森鳥  
一考  
あ徳  
斗丸  
全  
あ徳  
斗丸  
全

〇 牛乳と栳と森とて 平小別り  
 吹唐 照丸 蓮子 斗丸 柳乃 花夕 栳乃 二蝶  
 〇 牛乳と栳と森とて 平小別り  
 吹唐 照丸 蓮子 斗丸 柳乃 花夕 栳乃 二蝶  
 〇 牛乳と栳と森とて 平小別り  
 吹唐 照丸 蓮子 斗丸 柳乃 花夕 栳乃 二蝶  
 〇 牛乳と栳と森とて 平小別り  
 吹唐 照丸 蓮子 斗丸 柳乃 花夕 栳乃 二蝶

大塚波切不動尊額奉納句

文日堂評

志の波を利初て切り治め  
 人となすかハち言初乃 栳結之  
 のとやうき断つ波く押さへ  
 ちからハたきか塚の目貫之  
 そのちと巾袂のめれぬ切とやき  
 ちがあいでんれハ言夏の神承之

春駒 紀楽 森鳥 春駒 義徳 九龍 一文

三社と院定三社とあるづりの  
 おんくろがあらう中戸性波を弁  
 如菩薩とあらふあらふの仰利を  
 折軒の仰堂之をぶく乳不き  
 中月昔かろお細こあをまきれ  
 香の謎さけく中麓を毛揚る  
 この病と月と義とのる々あり  
 多木にまひ必の教る勝角力  
 嶋麓乃向うた略が一羽くんく

九龍  
 眉長  
 横好  
 眉長  
 春駒  
 二蝶  
 孤雲  
 一交  
 煎長

柳世七三三

を由秋と仔細うきまを定之  
 多の目とまらと世との宝之  
 中のうき嫁ありとまきんぞろ  
 當今うら嫁仙舟り母のそ  
 〇夜音で徐福うんげして空  
 東南の風く外新の番とわに  
 牙にあらまきと香の障るまいと  
 かぶらんで竹の子さびく孝をさ  
 方荒に名とあてられてまの迹

二蝶  
 谷水  
 雨江  
 其流  
 琴我  
 勇賀  
 一交  
 雨夕  
 梅鳥



孝行さあむ百の内をひらける  
 折糸合さアゆきぬら出さる  
 舞子の琴をそと二條あるまある  
 目の玉れ時中せんまお咽を唱  
 糸根をさあちのぬとまはら  
 あんごんで啼ばるをハ知つる  
 こむらぎやちらん梅とゆきほ  
 かまといつき方をるる己の  
 悲をに二階せぬとたむらる

文俄  
 保良  
 森鳥  
 都柳  
 賤丸  
 雨江  
 吹唐  
 丸龍  
 琴我

柳世七三十五

〇 春かこの口にはまのまおと付  
 〇 陰陽のぬいこの肌を寝ぬけ  
 村のがし志やちと極さあゆ  
 おいんかさくえんが志あれ  
 〇 大晦日撫々人の尾を巻ひ  
 あとのけにあらんて合と拾ふ  
 〇 つけやひうあさとしんがう巻る

焚雀  
 平壺  
 水守  
 和里  
 マイタ  
 轉寢  
 梅里  
 喜犬  
 風鳥

きせんあり 裸の虫とて行徳を  
 後のり 泣るおとをきてわら  
 おぶさるを思や ありき 何くも  
 松茸とさうさな 桂と子う虫  
 うらう人の山伏とていぬを  
 中祭の字の中 坊が目とそんし  
 さんちとていひと 女人堂とてい  
 ちふのち 福とていふの 門とてい  
 萬物の靈一物のちで出来  
 枝成  
 有華  
 一糸乃  
 都柵  
 風鳥  
 二蝶  
 林鳥  
 賤丸  
 馬遊

千七百三十六

軸

定菊や 凡そ 動うぬ

茶の茶

文日堂  
孫川

文化三寶年十月廿二日

願主

米虫

補助

牛賀  
千之  
豆人

小石川牛天神額奉納句

文日堂評

高木杉のむらえも津ざら  
うすい山脈高向す乃ま遠  
右居れ信念と素世のふゆ  
せんふくがきくお所の都ら  
ゆむさうの牛美代の古  
は命をむねやうじんを人  
席をさうら虫を連て

桃林  
谷水  
森鳥  
六川  
牛賀  
和里  
豆人

おいらんを流くぬの  
れぬと糶と園子見  
ハ乙女乃らぬの  
毎々ふと持とそ  
松舟ころんどう  
永世く家成ぬ  
骨の骨やぬ  
まろ子筆の隠  
師匠ぬころん

花夕  
素庵  
燕子  
松金  
吹磨  
和浪  
雨江  
物重  
魚川

神楽 志願のふのふに目があび  
 ちとれとととあ程を天気の晴く  
 世方に運達の流るい 俵幣のふき  
 子蔵のよふふまげ 碧捨て 金キ  
 万石とふ人ふ 度々宮口もかご  
 牛の沖あをまじのふとありい  
 〇 左衛門をと女 嫁入しと思つて  
 津を舟かぬとの 捨るも深き  
 捨らまじれ ころにあらむとん

青車  
 弄入  
 一文  
 弄毒  
 牛屋  
 二蝶  
 弄毒  
 弄毒  
 弄毒

係り 後進をせくかりごめと  
 是の沖新橋交を合を  
 〇 糸天が 布袋とく ちりじとと  
 〇 大いなる 助を力 甲中七 誘へ  
 まさりの 財と 七人 二めり 出  
 車坂 沖の ちを せれ 少く 二  
 け 糸と 志の ちり 捨る 初く 攷  
 勝子 様と 空に 少の 女帝 之  
 十二百 娘と けの ちと ちか ぬと び

和里  
 弄毒  
 弄毒  
 一文  
 水ち  
 弄毒  
 弄毒  
 弄毒

田島と丸や麻とにととちつる

六川

おのふどの爪でもりつるが年

牛賀

あはし口口を揚るまの爪

林鳥

がしとこのひをが姉か糸を川

松会

らよかひあつてお果を袖より出

泥糸

それとかがんごと用抱起

清静

是後心と本條へお社礼をさき

桃林

きあし又内のおまといどる

天作

お後書とさく賣あけ斗炭

青水

似城とるんさけごう女房さき

葱原

ひきて耳と大根もゆきあふ

桂花

きも隈りくはの根の枝

栞里

き寄山むくくお娘の物さふ

以成

○月くに月又る月をト女葉城

吹唐

考あんであつて神で隠はて

年毒

まあがひいーまうとト女ハ考子

尾子

まのめひ獨り角カをささけ

巨人

○鰐甲と波ぶ浪湯和合之

二蝶



